

講式から祭文へ — 『神祇講秘式』に関する一考察 —

星 優也

【要約】

中世神仏信仰・中世神道と儀礼の研究は、近年飛躍的に進展した。なかでも儀礼で読まれる祭文や講式といった文献群は、注目されつつあるが課題が多い分野である。とくに神々を（本尊）とする講式は、鎌倉時代以降に展開したことで知られるが、不明な点が多い。本稿で取り上げる『神祇講秘式』は、これまで言及こそされたが、正面から研究されたことがない講式である。とくに密教系で短文の秘密式は、講式研究でも等閑視されてきたが、そこに「神祇」がつく『神祇講秘式』は、その最たるものである。しかし『神祇講秘式』は、講式と祭文、中世神仏信仰の近世的展開、中世神道と修験道の関係を考えるうえで重要な文献である。本稿は、『神祇講秘式』の基礎的考察を行い、類似する書名を持つ『神祇講式』と比較検討する。つづいて具体的な儀礼における『神祇講秘式』の存在形態を明らかにし、最後は神祇講式、神祇講秘式という書名すらなくなり、新しい祭文として作り替えられ、展開していく姿を明らかにする。

つづき

講式とは、經典を講説する法会（講經法会。以下、講会）の式次第である。その特徴は、法会の次第だけでなく、講会で導師が読む式文と、職衆が唱える伽陀が記されることにある。講式は法会次第書であるとともに、具体的な儀礼を再現できる資料でもある(1)。

平安中期、比叡山横川首楞嚴院で源信を中心に二十五三昧会が行われ、やがて『二十五三昧式』が創られた。これが講式として最初期のものとしてされている。以降、永観作『往生講式』や真源作『順次往生講式』など、平安浄土教の展開とともに講式が作られ、往生講や阿弥陀講が貴族社会で行われた。また平安末期には、覺鑿によって『愛染王講式』や『多聞天講式』、『不動講式』など、明王や天部を（本尊）とする密教の講式が作られる。

こうした講式の展開は鎌倉時代に花開き、貞慶は『地藏講式』や『観音講式』、『舍利講式』など、また明恵も『四座講式』、『涅槃講式』、『十六羅漢講式』、『遺跡講式』、『舍利講式』を作るなど、講会の（本尊）が拡大する。そこで見逃せないのは、神々の講式がつくられたことである。貞慶と明恵は春日信仰の講式を作成しており、慈円も『山王講式』や『十禅師講式』を著している。また『熱田明神講式』や『八幡講式』、『荷田講式』、『天神講式』などが出現し、さらには、神の存在そのものを対象とする『神祇講式』が成立した(2)。

これまで講式については、主に文学研究（中世文学・仏教文学）から進められ(3)、軍記物語や仏教説話と經典を架橋する「沃野」として注目された(4)。しかし、中心は対句表現が美しい天台の講式であり、真言や神々の講式は触れる程度であった(5)。

さらに講式研究で等閑視されてきたのは、「秘式」「講秘式」と呼ばれる秘密式である。講式は、基本的に三段から十段で構成されることが多いが、秘密式は一段で終わる短文の講式である。真言系に多く、伝空海作や覺鑿作のものが多い。しかし難解な内容であり、ほとんど言及されることがない。講式研究における課題の一つとなっている。

また秘密式は、具体的にどのような儀礼で読まれたのか、全貌が見えにくい問題もある。行者の個人祈祷用であることが想定されるが、その儀礼像は導師と職衆によって構成され、聴衆がいることもある講經法会とは全くことなる。

そんななか、唯一神々の秘密式について、船田淳一が頼助作『八幡講秘式』（弘安九年（一二八六））を分析した先駆的な成果がある。船田は、『八幡講秘式』の内題に「座不冷常住」と書かれることに注目し、かつて鶴岡八幡宮で修された座不冷本地供という儀礼で読まれた可能性を指摘した(6)。このように、秘密式は講式のジャンルに属しつつ、講の式次第として独立したのではなく、特定

の儀礼作法の一つとして組み込まれたものであった可能性が高い。その姿は講式というよりむしろ祭文に近いと言える。このことは、これまで分かりにくかった秘密式の儀礼の場を明らかにした点でも大きい。

あらためて祭文とは、神仏に向けて読み唱えられる祈願文のことであり、平安期から法会や祈祷をはじめ、中世後期以降になると神楽で読まれる(7)。近年は中世祭文の研究が進みつつある(8)が、平安後期以降、中世を通して展開した講式と、中世後期に広がる祭文の関係は、よくわかっていないことが多い。こうした研究状況に対し、筆者は鎌倉期成立の神々の講式である『神祇講式』に注目し、中世後期から近世前期には神楽や祈祷の祭文として変容する過程を明らかにした(9)。

以上の研究史に基づき、本稿は『神祇講秘式』を取り上げる。詳しくは後で述べるが、これは空海作とする秘密式の一つで、名称から『神祇講式』との関わりが想起される。これまで存在自体は知られていたが、正面から研究されることはなかった。しかし本稿で論じるように、『神祇講秘式』は講式と祭文の関係を考えるうえで重要な秘密式なのである。

以下に本稿の基本的な構成をまとめよう。第一章で『神祇講秘式』の基本情報についてまとめる。第二章では、『神祇講秘式』が読まれた具体的な儀礼の場に迫り考察する。そして第三章では、講式から祭文へと変容する過程を追うこととする。

第一章 『神祇講秘式』について

(1) 『神祇講秘式』の伝本

『神祇講秘式』は、その書名のとおり「神祇」を(本尊)とする秘密式のことである。高野山大学図書館に寄託される伝本には、「御作」と書かれていることから、弘法大師空海の作の講式と伝わるが仮託である。中世神道書の多くは、『中臣祓訓解』や『麗氣記』、『妙覚心地祭文』など空海作とするものが多く(10)、秘密式は覚鑿が作成したもののほか、空海や最澄に仮託されることがある。『神祇講秘式』もその一つであろう。

現在『神祇講秘式』は、『大神神社史料 三輪流神道篇』(吉川弘文館、一九八九年)に翻刻され、ウェブ上でニールス・グェルベルクが翻刻している(11)。また『高野山講式集』(DVD・ROM版、小林写真工業株式会社)には、グェルベルク翻刻本と思しき高野山金剛三昧院旧蔵本の写真版が収録されている。本稿は、『高野山講式集』所収の金剛三昧院本および講式データベース公開のものを底本として分析する。

ここで『神祇講秘式』の伝本についてまとめよう。ニールス・グェルベルクは、講式データベースで次のように報告している。

- ・高野山大学(特12/シ金/24)室町時代
- ・醍醐寺(207/45/1)室町初期以前
- ・醍醐寺(210/9)写 安政六(一八六〇)年 善海
- ・醍醐寺(214/4)写 寛政四(一七九二年) 晁深
- ・醍醐寺(214/34)写 寛政五年(一七九三)

ニールス・グェルベルクにより、醍醐寺にも近世にかけての伝本が存在することが明らかにされた。最初の高野山大学本は、分類番号から金剛三昧院本であり、『高野山講式集』のものであるとわかる。醍醐寺本については、かつて岡田莊司が興味深い指摘をしていた。

本稿の対象とした『神祇講式』『神祇講私記』以外の、類似した書名である『神祇講秘式』が高野山等に所蔵されている。同文の内容は醍醐寺にも「神祇講式」(所蔵番号二〇七―四五)の書名で、「弘法大師作」「謹敬白天地神祇而言。夫有体者正含心識、有心者必具仏性、々々法性遍法界而不二也(以下略)」で始まる短文がある。これと、流布本の『神祇講式』とは一致する字句は殆どない¹²⁾。

これは「醍醐寺(207/45/1)」が該当すると思われるが、この『神祇講秘式』は『神祇講式』の書名であるという。このことは、本稿に関わる重要な指摘である。「神祇講式」と称しながら、「一致する字句は殆どない」異貌の『神祇講秘式』が存在する事実。果たしてこれをどのように考えるべきだろうか。

これら以外の伝本は、前述した『大神神社史料』に収録される三輪流神道本であるが、高野山大学図書館に所蔵されているようだ。また『かつらぎ町天野丹生家文書目録』(和歌山県立図書館、二〇〇一年)には、「祭祀・祈禱」の項に卷子本「神祇講秘式」(た・3

4) が示され、奥書に「延宝九年辛酉二月上旬南西田木清春進之」と朱書されている情報がある。丹生家は、丹生都比売神社の社家で、代々高野神子明神（高野明神）を守ってきた。『明神講式』（た・35）も伝わることから、丹生都比売神社の儀礼（明神講か）で読まれたことが想定できる。

以上のことから、現状では高野山大学、醍醐寺、丹生都比売神社の社家に伝来していたことがわかる。そして多くは近世のもので、醍醐寺のものは神祇講式の名で伝えられている。

三輪流神道関係に目を向けると、『三輪流神道伝授目録』（文政五年（一八二二））には『神祇講秘式』の書名が見え、神道灌頂を伴い相伝されていたことがわかる。また『三輪流神道口決・下』（文政三年（一八二〇））は「神祇講秘式」の項が立てられ、次のように書かれる。

此一紙至極ノ式也。不レ出_二他山_一也。

三輪流神道において『神祇講秘式』は、決して他山に流出してはならない、最上の「至極ノ式」であったようだ。相伝目録に見えることから、神道灌頂を経たもの以外触れることができなかったことも考えられよう。また『神祇講式』も同時に相伝されることから、著名な『神祇講式』が渡され、そこに「至極ノ式」という形で『神祇講秘式』が師資相承されたことが想定できる。丹生家にも三輪流神道や御流神道の文献が伝わり、関連がうかがえる¹³⁾。

（こ）まで『神祇講秘式』の基本的な情報がわかった。では具体的にどのような内容なのかについて、次節で見よう。

(2) 『神祇講秘式』の概要

『神祇講秘式』は、一段式の短文であるため、講式データベースの全文を引用する。

敬白一切三寶・大小神祇而言。夫以、有體者正含心色。有心者必具佛性。佛性法性變法界而不二也。自身他身一如亦平等也。謂天謂地、佛性物體。云内云外、妄執別執也。悟之者、常遊五智臺、迷之者、永流三界泥。大日如來、獨鑒三昧妙趣、特視六趣塗

炭。然者、諸神等皆是大日如來分身、隨宜利物方便也。垂跡萬邦、普現色身應用、施化六道。所以、上聖不離其體、下凡又即其相也。爰以、神爲人父母、人爲神子孫。神獨不貴、得人法施、增威光。人獨不安、蒙神護持、成悉地。乾坤雖遙、運志有驗。如應響音。神靈雖隱、致信心無空。如順影形。然則、留廣恩行者首、拂恠危、未然外福智、任弟子之意、成所望如願。爰以、知神威光、謹言。而和光同塵、結緣始、八相成道、利物終。

願以此功德 普及於一切
我等與衆生 皆具成佛道

南無歸命頂禮日本國中大小神祇倍增威光

信心施主現當所願皆令滿足。敬白。

ここで『神祇講式』と直接関係がある部分は、最後の「願以此功德 普及於一切 我等與衆生 皆具成佛道」の廻向文である。ただし、これは『二十五三昧式』をはじめ数多くの講式に見えており、今日の法会でもよく聞くものである。最後の廻向文と南無伽陀部分を除き、式文のみで構成されていることがわかる。

この形式は、『大神神社史料』所収の『神祇講秘式』と基本的に同じである。しかし三輪流神道のもの最後の廻向文がなく、冒頭の「敬白一切三寶・大小神祇而言」の敬白も削除されている。

ここから内容について見てみよう。まず一切の「三宝」（仏法僧）と大小の神祇（天神地祇）に向けて敬白することからはじまり、「夫以」として本題に入る。

まず「有体」（形あるもの）は精神と物質を持ち、「有心」（心を有するもの）は仏の性質を持つとする。その仏性と悟りそのものである法性は、全宇宙において分かつことができず、自身も他者も一つにして平等であり、天地すべてに仏性があると説く。

「神祇」の秘密式として見逃せないことは、「諸神等皆是大日如來分身、隨宜利物方便也。垂跡萬邦、普現色身應用、施化六道」とする部分である。『神祇講秘式』では、大日如來が特に「六趣塗炭」（六道の苦しみ）を視ており、「然者」として神々はすべて大日如來の「分身」すなわち、仏が衆生を救済するために形を変えて現れた存在であり、衆生の程度に応じて救済を講じているのだとする。そして「万邦に跡を垂れ、普現色身応用」とあり、あらゆる地域に垂迹して現れ、衆生救済のために働いていると述べる。三輪流

神道のものには、「施化六道」のあとに「等々利^ヲニ一切ノ群生^ヲニ」という一文が入る。六道世界において多くの人々を救済する意味になり、対句的に相応しい。三輪流のものは現行本を補完できる。

神為人父母、

人為神子孫。

神独不貴、得人法施、増威光。

人独不安、蒙神護持、成悉地。

続くこの箇所には、神と人の関係が説かれる。神は人の父母となり、人は神の子孫である。神は単独で貴い存在になれず、人による神前読経などの供養によって、その威光を増すことができるように、人も独りでは安んずることができず、神の護持を被ることで悟りを開くことができるという。

このように『神祇講秘式』は、大日如来が姿を変えた存在としての「神祇」が、常に衆生を救済する働きを行うことを説く。そして最後の「和光同塵、結縁始、八相成道、利物終」すなわち、仏が衆生の程度に応じて姿を変える「和光同塵」は救済の始まりであり、悟りに至ることはその終わりである。これは中世の本地垂迹信仰で頻出する言葉で、『神祇講式』にも見える。

『神祇講秘式』の注釈的研究は今後課題であり、本稿は要点を述べたにとどめたが、大日如来の「分身」として神々が衆生救済を働くことを前面に出している。『神祇講式』とは名前が類似し、いくつか共通点もあるが、神々の救済に関連して違いが見える。

あらためて『神祇講式』とは、「神祇」を（本尊）とする講式であり、解脱房貞慶の作と伝承している。「讚諸神本地」「述垂迹利益」「廻向発願」の三段構成で、一段式である『神祇講秘式』とは規模が異なる。しかし異なるのはほかにもある。

まず神々について、『神祇講秘式』は「大小神祇」「諸神」とするが、『神祇講式』では「神冥」という聞きなれない表現で貫徹される。「神冥」については別稿で詳述したが⁽⁴⁾、構成から「神祇」「尊神」に対して「冥道」であり、「神祇冥道」「神祇冥衆」を意味し、第三段「廻向発願」では、閻魔王や泰山府君など冥府の神々も勧請されている。これに対して『神祇講秘式』には、冥府の神々や「神冥」の記述はない。この点だけでも両書は異なる。

『神祇講式』は、釈迦による「西天」（インド）での救済に漏れた「東土」（日本）の人々を救済するべく、「神冥」が働いていると説く。「西天」と「東土」という仏教的的世界観に基づく地域意識が前提にあるが、『神祇講秘式』は明記されず、「神」「人」「父母」「子孫」という普遍的な関係性を創り出す。また『神祇講秘式』は、「諸神」はすべて大日如来の「分身」であると直接的に述べている。『神祇講式』のような物語的な神話を語ることなく、神は大日如来であるという神学に至っている。あえて区分けするならば、神話を説く『神祇講式』に対し、神学を語る『神祇講秘式』とすることができる。

以上みたように、『神祇講秘式』は、書名こそ伝貞慶作『神祇講式』に類似するが、真言密教の大日如来への信仰をもとにより深め、より普遍的な「神」と「人」の救済関係を論じる。それだけに具体的な儀礼の場が気になるところである。

次章では、『神祇講式』との関係に留意しつつ、いかなる儀礼の場で『神祇講秘式』が読まれたのかを考察しよう。

第二章 儀礼のなかの『神祇講秘式』

(1) 多武峰の遷宮儀礼と大織冠・弘法大師・夢想

光栄『地鎮遷宮作法注解』（享保四年（一七一九）談山神社文書一九八〇号）は、談山神社（多武峰妙楽寺）の遷宮作法をまとめたものである。該当箇所を翻刻したものを提示する。

次諸神祇印 智拳印

次三身得印 外五鈿印／三十二相具足印ナリ

次唇

神明無外恭敬忽頭祭席有無非遠勤行即在胸中

神樂大事

外五鈿（五人神樂男）

八葉（八人八乙女）

中臣祓并六根淨 如常

或神祇講式

神祇講式

先惣礼

諸佛救世者 住於大神通

爲悅衆生故 現無量神力

夫以、有躰者正含心識、有心者必具佛性、佛性法性通法界而不(マ)土也、自心他心又一如平等也、日天日地、佛性其躰、一云内云

外、忘心之別執也、悟之者、常遊五智臺、迷之者、恒沈三界泥、大日如来、獨鑒三昧之妙處、觀六趣之塗灰矣、然諸神等皆是大

日如来分身、隨喜利物方便也、垂跡於万巷、施化於六道、上聖不離其躰、下凡亦其躰也、以茲、神為人爲父母、人爲神子息、神

獨不樂、依人法施、增威光、人獨不樂、蒙神護持、成悉地、依之神護人、人仰神、乾坤雖遙、運志有驗、如響應聲、神靈雖爲陰、

致信有威如影隨形、然則、留廣恩於行者、恠拂禍厄於未然外福智、任〔某申〕心、令成就所望於意樂中、是以、爲事効知神威光、

謹敬自乃至法界平等利益

願以此功德等云々 四弘誓願

大織冠御作弘法大師夢想傳云々

(私に読点を付けた)

「諸神祇印」として智奉印が結ばれ、三身得印として五鈷印を結ぶ次第のあと、「唇」として「神明無外恭敬忽顯祭席有無非遠勤行即在胸中」が唱えられる。これは、前半部分は『神祇講式』啓白文にみえる「**神冥無于外、恭敬則顯祭席**」から来ている。『神祇講式』の表現である「神冥」が「神明」に、「則」が「忽」に改められている。また「有無非遠勤行即在胸中」は、つづく「淨土非于遙、勤行則在於道場」との関連が窺える。『神祇講式』では、「淨土」は遠い場所にあるのではなく、勤行すれば道場に現れることを説くが、『神祇講秘式』は、勤行すれば神明が胸中にあるとする。「冥」や「淨土」といった用語は消えている。『神祇講式』の言葉に基づきつつ、独自の表現を作る場が見えてこよう。

つづく「神樂大事」で八乙女と神樂男を見立て、八葉印、五鈷印を結び観想する。やがて中臣祓か六根清淨祓を読むが、見逃せな

いのは、「或」はとして神祇講式を読むことだ。しかし、この神祇講式は『神祇講秘式』である。前述したように、岡田莊司は醍醐寺に神祇講式と称しつつ、内容は『神祇講秘式』という伝本を紹介した。多武峰の記述は、一部字句が異なるが、神祇講式という名の『神祇講秘式』が読まれていたことを示している。

詳しく見てみよう。冒頭の「惣礼」だが、『神祇講式』の惣礼伽陀「我此道場如帝珠・十方諸神影現中・我身影現神祇前・頭面接足帰命礼」ではなく「諸佛救世者・住於大神通・為悦衆生故・現無量神力」である。これは『神祇講式』第二段の伽陀だ。また、途中で「某甲」と願主の名前が入るなど、『神祇講秘式』の具体的な儀礼の在り方が垣間見える。

興味深い記述が最後にある。あらためて引用しよう（私に読点をつけた）。

大織冠御作、弘法大師夢想傳云々

これは多武峰の「神祇講式」（『神祇講秘式』）は、大織冠すなわち藤原（中臣）鎌足が作成したことになる。多武峰妙楽寺は鎌足（談山権現）を祀っており、中世末期には『談山権現講式』も作成されている¹⁵⁾。この伝承は、より談山信仰に即したものであるとわかる。だが、注目すべきは「弘法大師夢想傳」という記述である。大織冠鎌足が作成し、弘法大師空海が夢想を感得し、伝授されたこととなる。多武峰の神祇講式は、厳密には大織冠鎌足自らが作ったものになるのである。

これは講式の仮託記事の問題として見逃せない。「大織冠」からという点は談山信仰の背景がうかがえるが、中世後期の多武峰において神祇講式（『神祇講秘式』）は、主祭神が宗教者に啓示した講式として理解されていたことになる。一つの可能性であるが、今日伝わる『神祇講秘式』の空海作や『神祇講式』の貞慶作という作者像は、「夢想」など何らかの宗教体験を通して感得したものもあるのではなからうか。事実として中世神道書には、『麗気記』のように醍醐天皇が天女から啓示を得たものがあり、「偽書」の作成と宗教実践が密接であることは、近年の中世神道研究によって具体像が明らかになりつつある¹⁶⁾。

多武峰の遷宮儀礼は近世初期のもので、どこまで古く遡れるか不明である。しかし同時期に『神祇講秘式』を読んだ儀礼が確かに存在する。浄土宗の儀礼である。

(2) 増上寺「三段式」の儀礼世界

増上寺は、現在東京都港区にある浄土宗寺院である。正月元旦の年中行事に「三段式」と呼ばれるものがあり、現在も大殿でおこなわれている。この三段式は、正式名称を「正月祝坐中之法式」といい、講式を読む儀礼である。

浄土宗の講式といえば、隆寛作『知恩講私記』が有名であるが、増上寺では『附法講略式』『神祇講式』『熊野略式』の三種を読んでいる。浄土宗寺院で神々の講式、それも「神祇講式」が読まれること自体驚きである。

現在、増上寺二世暁誉位産が記した慶安三年（一六五〇）の『正月祝坐中之法式』および『熊野之三段式』が伝わり、倉昭順によつて紹介された¹⁷⁾。慶安三年本の次第は、以下のようになっている（「附法講略式」「熊野略式」本文は割愛。構成部分を示し、本文を翻刻した）。

「附法講略式」

惣礼（十方恒沙佛 六道照知我 今乘三尊教 廣開浄土門）

式文（一段式）

伽陀（自信教人信 難中轉更難 大悲傳普化 真成報佛恩）

南無三国伝来浄土仏通諸大祖師／南無開山代々報恩謝徳／南無自他法界平等利益

・ 十四行偈一卷

「神祇講式」

惣礼（我此道場如帝珠 十方諸神影現中 我身影現神祇前 頭面撰足帰命礼）

式文（一段式）

伽陀礼文（和光同塵結縁始 八相成道利物終）

・ 心経三卷

・ 廻向

南無日本国中大小神祇佛神法楽／南無伽藍安全興隆仏法衆僧和合／南無自他法界平等利益

所修功德廻向

三宝境界廻向

金輪聖王天長地久御願円満廻向

当寺繁昌衆僧和合興隆仏法廻向

当寺檀那家内安穩廻向

当所人民快樂廻向自他法界平等利益

我等与衆生 皆共成仏道

「熊野略式」(惣礼如上)

式文(一段式)

心経三卷

伽陀礼文(廻向如上)

南無熊野三所権現王子眷属威光倍增

ここでの式文はすべて一段式であり、「略式」の名前からわかる。増上寺の神祇講式本文を翻刻すると次の通りである。(私に読点を付けた)

敬白、夫以、有躰者正含心識、有心者必具佛性^云、法性法界遍而不二^{ナリ}也、自身他身^モ亦一如平等也、謂天謂地眞佛惣^{ナリ}、謂内謂外、忘心之別執也、悟之者、常遊五智臺、迷之者、鎮沈三界泥、大日如来、獨鑒三昧之妙處、殊見六趣之塗塵、然諸神等皆是。大日如来分身、隨機利物方便也、垂跡於万邦、普賢色心応用、施化於六道、是故、上聖不離其躰、下凡亦則其躰、爰以神為人^ノ之父母、人亦為神子息、神獨不尊、人待法施増威光、人獨不樂、蒙神護持、成悉地、神乾坤雖遙、運志有驗、如響應音、神靈雖隱、致信無虛、如影隨形、然則、留廣恩於行者、頭拂禍厄、未然外福智、弟子意、成所望意樂、内證謹敬白

「三段式」の神祇講式は、『神祇講秘式』の内容である。ここでも『神祇講秘式』は、神祇講式という書名で読まれていた。では、どのような儀礼構成の中で読まれるのか。

正月元旦の増上寺では、外陣正面に向けて経机・礼盤・酒水器が置かれ、やがて増上寺法主が入堂し、導師を自ら務める。また増上寺の山内寺院関係者が全員職衆となる。焼香三礼を行ったあと広開偈（十方恒沙佛 六道照知我 今乘三尊教 廣開浄土門）を唱え、附法講略式に入る。ここでは釈迦をはじめ、阿弥陀仏、諸仏、浄土三部経、浄土教の祖師たちを讃嘆し、法然から代々受け継がれる現在に報恩する。それに続き神祇講式が行われる。

ここでの神祇講式は、最初の惣礼伽陀（我此道場如帝珠 十方諸神影現中 我身影現神祇前 頭面撰足帰命礼）は『神祇講式』と同じである。しかし本文は『神祇講秘式』であり、本文に組み込まれてははずの「和光同塵結縁始」以下の文が、「伽陀礼文」になっている。そして日本国中の神々を讃嘆するのだが、同時に「伽藍安全」「興隆仏法」「衆僧和合」を祈り、六種類の廻向になる。

神々全般を祈ると、最後に熊野略式となり、阿弥陀仏が本地であり増上寺鬼門に鎮守神として祀られる熊野権現を讃嘆する。このように増上寺法主が中心となり、山内寺院の僧侶を率いて熊野権現をはじめ神々に祈る儀礼が、増上寺三段式の世界である。『神祇講秘式』は、ここでは多武峰で遷宮師が一人行い秘密式ではなく、導師と職衆による講式儀礼として再組織化され、神祇講式という名称で修される。

以上、ここまで見たように、近世前期段階で『神祇講秘式』は、神祇講式の名で多武峰や増上寺の神祭祀で読まれたことがわかった。神祇講式という名前が権威となり、中世後期以降に空海作の講式として展開した事例といえる。『神祇講秘式』が近世期に広く使われたことは、現存する諸本からわかるが、伝貞慶作『神祇講式』と併存し、中には神祇講式の名前で展開していたのである。次章では、以上とは別の問題を見てみよう。

第三章 講式から祭文へ

(1) 『神祇講秘式』から『神祇通用之祭文』へ

ここまで見たように、近世の高野山において『神祇講秘式』は、空海作として展開していた。それが先に見た三輪流神道の相伝書としてのほかに、空海作の独自の祭文として、神祇講式という名称すらもなくなって展開した『神祇通用之祭文』が出現する。

『神祇通用之祭文』は、『弘法大師全集(旧版)』八巻に収録される空海仮託書の一つである。以下、短文なので引用しよう。

供酒供香華

敬白天神地祇而言。夫有體者含心識。有心者必具佛性。佛性遍法界而不二也。自身他身全一如平等也。曰天日地、真佛性惣體也。謂内謂外、心別執也。悟之、常遊五智蓮臺、迷之者、常沈三途土泥。大日如來、獨鑒三昧妙證、見六趣塗炭。故、諸神等是大日如來化現、為衆生濟度、垂跡萬邦、化令施六道。爰以、神爲人父母、人爲神子孫。神獨不尊、以人法施、增威光。人獨不樂、蒙神擁護、成悉地。乾坤雖遙奉運志、如隨影形。雖隱神靈、於信無空、如応響聲、爾〔護持某甲〕任意致祈念、念成所望、意樂内、諸災令拂未念外、謹請再拜再拜。

次心經三卷 次諸神真言

オン・ロキヤロキヤ・キヤラヤ・ソワカ(梵字)

毎日法施以上畢

全文引用したが、全体的にはほぼ『神祇講秘式』の記述に基づき、短縮しつつ一部改編して構成される。また後半は「諸災令拂未念外」を祈るなど独自の記述となる。この後に『般若心經』と諸神の真言、また天部神の全てに対する諸天総呪の真言が唱えられる。

高野山の神祇祭祀における使用は、現状不明な点が多い。しかし「神祇通用」と神祇全般に通じるものとされ、さらに「毎日法施」とあるように、高野山における日々の神祇祭祀でよく使われた祭文といえよう。恐らく酒と香華を供え、この祭文が誦誦されたのだろう。そして何より、もはや秘密式のような講式ではなく、祭文に作り替えられたことは大きい。

近年、祭文研究が進みつつある。とくに中世的な信仰世界を継承した、中世後期や近世期の祈禱や神楽で使用される祭文は注目されている。祭文研究では、講式は筆者が『神祇講秘式』の神楽祭文への展開を論じた以外、ほとんど視野にはいっておらず、また講式研究でも祭文は別ジャンルの扱いを受けていた。しかし、『神祇講秘式』と表現が類似・一致する『神祇通用祭文』の存在は、近世期には講式と祭文が近い関係にあったことを物語っている。今後の祭文や講式の歴史研究において、意義を持つものとなる展望がみえよう。

さらに『神祇通用祭文』は展開する。これは修験道においても使われることになる。

(2) 中世神道から近世修験道へ

近世の修験道当山派に取り入れられている事例がある。それが『神祇通用之祭立』である。これはまさに『神祇通用祭文』とほぼ同文なのだ。修験道当山派の『修験深秘行法符咒集』巻五〔『修験道章疏』三卷『日本大藏経』九四卷〕から引用しよう。

百七十九 神祇通用之祭立

上酒御供香華弘法大師御作

先護身法。 次錫杖。

敬白ニ天神地神ニ言。夫レ有レ體者ハ含ニ心識ニ。有レ心者ハ皆具ニ佛性ニ。自身他身全ク一如ニシテ平等。謂レ天曰レハ地眞佛之總體也。謂レ内曰レハ外妄心之別執也。悟レ之者常遊ニ五智ノ臺ニ。迷レ之者常沈ニ三途ノ土泥ニ。大日如來獨鑿ニ三昧證ニ。見_玉フニ六趣ノ塗炭ニ。故諸神等は大日如來化現、為ニ衆生濟度ニ垂ニ_レ跡萬方ニ令レ施ニ化六道ニ。爰以神ハ爲ニ_{タリ}人父母ニ、人爲ニ神ノ子孫ニ。神獨不レ尊、待ニ人ノ法施ニ、増ニ_ス威光ニ。人獨不レ樂、蒙ニ神擁護ニ、成ニ悉地ニ。乾坤雖レ遙奉レ運ニ於歩ニ如隨ニ_レ影形隱神靈雖レ隱、致ニ_セハ於信ニ如ニ響應ニ_レ聲。爾而〔護持ノ弟子施主〕任意致ニ_セハ祈念ニ成ニシ所望ヲ于意樂ノ内ニ、諸災ヲ令拂未念ノ外ニ誇ニ陶朱猗頓之榮ニ。乃至法界平等利益。敬白ス。謹請再拝再拝。

次心経 次諸神真言 オン・ロキヤロキヤ・キヤラヤ・ソワカ（梵字）

毎日法施以上畢

返り点が付されている以外は『神祇通用之祭文』そのものである。「弘法大師御作」と明記され、修験道儀礼として九字の護身法と『錫杖経』の読誦が追加されている。しかし、ここに至ると、もはや『神祇講式』の痕跡すらない。『神祇講式』とは別の神祭祀の祭文として展開しており、『神祇講式』と併存していたのである。さらに『神祇通用之祭立』を収録する『修験深秘行法符咒集』巻三には、「神祇講式法」なるものがある。

百十一神祇講式法

先護身法如常

不動火界印。 火界咒

八葉印。 アビラウンケンバザラダトバン (梵) 誦納

内縛ニシメ中指立合アビラウンケン (梵) 急急如律令

全く『神祇講式』の本文を読むような箇所はない。近世以降のことであろうが、『神祇講式』は修験道書として読まれたとき、講式本文を読誦するよりも、神祇講式という名前が一つの権威となったことがわかる。ここまで見た『神祇講秘式』から『神祇通用之祭文』、そして『神祇通用之祭立』もそうした経緯から創られた祭文であった。一方『神祇講式』も名前のみ留め、不動火界印と八葉印による新しい儀礼を生み出したのである。

筆者はかつて、貞慶作と伝わる『神祇講式』の書物そのものが、中世後期から近世前期の地域社会において、法印や法者などによる神楽祭文として読まれることは指摘した。しかし、「神祇講式」という名前が権威を持ち、全く新しい祭文テキストが生成されることとが、『神祇講秘式』の展開から明らかになった。

かつて『日本書紀』を意味する「日本紀」という言葉が、古代や起源を意味する記号として使われ、「日本紀」（「日本記」）に仮託する運動を中世日本紀として捉えられた¹⁸。

神祇講式という書名も同様に、神祭祀の「日本紀」として理解され、神祇講式の名で新しい神祇祭文が創られたと考えられる。そして「弘法大師作」であり、大日如来の「分身」として神々全てを位置づけた突出的な『神祇講秘式』は、「至極ノ式」としつつも相伝を経て広がり、多武峰の遷宮作法や増上寺の講会、さらに高野山や修験道の神祭で使われていった。やがて神祇講式という名称もなくなり、独立した祭文として展開した。

以上まとめると、『神祇講秘式』は『神祇講式』からも離れ、独立した神勸請の祭文として当山派で受容されていった。『神祇講式』は展開するなかで秘密式を生み出し、やがて真言宗の神祭祭文、そして修験の神祭祭文へ変貌したのである。

神祇講式の名を冠しつつ、一部を取り込んで秘密式となった『神祇講秘式』と、『神祇講秘式』を講式という性格から祭文へと変容

させた『神祇通用之祭文』。さらに近世以降、修験の神祭祭文として読まれた『神祇通用之祭立』。以上の経緯を考えると、講式と祭文の関係について、講式↓秘密式↓祭文を想定することもできるが、これは展望にとどめよう。

またこのことは、神楽や神舞の祭文に変容した『神祇講式』の事例と合わせると、これまでその関係が不明であった中世神道と近世修験道の関係が、三輪流神道や当山派修験道、そして神楽や祈祷といった側から、そのつながりを考えることができるのである。

おわりに

以上、本稿は『神祇講秘式』の流布と展開を中心に、まだ不明な講式と祭文の関係について考察した。明らかになったことは、次のようにまとめられる。

①西天／東土という仏教的世界や本地垂迹の体系を説明する『神祇講式』に対し、すべては大日如来に通じるといふ神学を『神祇講秘式』は生み出していた。

②多武峰の遷宮作法において、神祇講式の名称で『神祇講秘式』が読まれていた。

③増上寺の正月講会において、『神祇講秘式』は神祇講式（「神祇講略式」）として読まれ、現代に至っている。

④近世高野山では、『神祇講秘式』は『神祇通用之祭文』という独立した祭文に組み替えられ、やがて近世修験道当山派において、神祭で使用されている。

⑤神楽祭文の事例も関連させ、講式から秘密式、祭文という展開が想定できる。また『神祇講式』と『神祇講秘式』の問題は、中世神道と近世修験道の関係について、今後深めることができる可能性を持つ。

秘密式をはじめ、真言密教の講式は基礎調査から課題であり、本稿では十分に踏み込めなかったが、式文の注釈的研究から教学や思想について、さらなる分析は必要である。

かつて講式は失われた儀礼として見なされたが、地域の祭文や修験に視野を広げると、さらなる宗教文化史像を切り拓くことができる。それは書物や表象の解釈から描く、宗教的・文化的実践の歴史を叙述することにつながるだろう。

注

- (1) 講式の基本的な情報は、山田昭全「講式とは何か」(『講会の文学』(山田昭全著作集1)おうふう、二〇一二年、初出は『大法輪』第五〇巻一二号・第一一巻一号、二号、一九八三年二月〜一九八四年一月、二月)、ニールス・グウルベルク「中世文学における講式の意義」(『国際日本文学研究会集会議録』第一七回、一九九三年)、同「講式とは何か」(二松學舎大学『声明資料集』(日本漢文資料・楽書篇)二〇〇六年)、同「法会と講式―南都・北嶺の講式を中心として」(楠淳澄編『南都学・北嶺学の世界』(龍谷大学アジア仏教文化研究叢書)法藏館、二〇一八年)を参照。
- (2) 岡田莊司「『神祇講式』の基礎的考察」(『大倉山論集』第四七輯、二〇〇一年)、佐藤真人「貞慶『神祇講式』と中世神道説」(『東洋の宗教と思想』第一八號、二〇〇一年)、星優也「『神祇講式』の流布と展開」(『鷹陵史学』第四二号、二〇一六年)。
- (3) 講式研究は、早くに筑土鈴寛「講式の歴史的考察」(『宗教芸文の研究』中央公論社、一九四八年、初出は『現代仏教』第二七号、一九二六年)が先鞭をつけ、以降は山田昭全、清水宥聖、ニールス・グウルベルクへと研究が展開した。近年は仏教から楠淳澄により貞慶の講式について分析が進められている。楠淳澄『貞慶撰『唯識論尋思鈔』の研究 仏道篇』(法藏館、二〇一九年)、同「貞慶の浄土信仰と仏道―講式を中心として」(『仏教文学』第四四号、二〇一九年)。
- (4) 山田昭全「講式と中世文学」(前掲『講会の文学』)所収、初出は『国文学 解釈と鑑賞』第五一巻六号、一九八六年)。
- (5) 密教の講式に関しては、覚鑊の講式について、布施浄慧「興教大師の講式」(『現代密教』第二号、一九八九年)、清水宥聖「興教大師覚鑊の講式―その方法と東寺宝菩提院本の紹介」(興教大師研究論集編集委員会編『興教大師覚鑊研究』春秋社、二〇〇八年)、赤塚祐道「覚鑊の『舍利供養式』をめぐって」(『印度學佛教學研究』第六一巻一号、二〇一二年)、郭佳寧「覚鑊撰『多聞天講式』考―講式をめぐる思想・信仰・伝承の生成」(『日本宗敎文化史研究』第四三号、二〇一八年)が近年の成果である。また赤塚祐道「中世における舍利信仰の一考察―『秘密舍利式』と『道場観大師法最秘』をめぐって」(『密敎学研究』第四二号、二〇一〇年)は、文観作『秘密舍利式』について考察している。神々の講式に関しては、神道史研究から小島鉦作「稻荷明神講式と荷田講式」(『朱』第二八号、一九八四年)、岡田莊司「荷田講式」(『朱』第四〇号、一九九七年)、平泉洸「白山講式について」(『皇學館論叢』第二〇巻第一号、一九八七年)があり、文学研究から川口久雄「白山権現講式と白山曼荼羅」(『山岳まんだらの世界』(日本列島の原風景1)名著出版、一九八七年、初出は『日本海域研究報告』第四号、一九七二年)、金子良子「丑日講式」(『みる本地垂迹と管弦歌詠』(法政大学『大学院紀要』七一号、二〇一三年)、松山由布子「津島神社所蔵『牛頭天王講式』と奥三河伝来『牛頭天王五段式』の関わりについて」(『愛知県史研究』二二号、二〇一七年)がある。また仏敎史研究からは有働智英「南都仏敎における神祇

祭祀の一考察—薬師寺蔵『八幡講式』の検討』（『南都仏教』八五号、二〇〇五年）が出ている。思想史研究としては、船田淳一「貞慶『春日権現講式』の儀礼世界—春日社・興福寺における中世神話の生成」（『神仏と儀礼の中世』第三章、法蔵館、二〇一一年、初出は『日本文学』六一二号、二〇〇四年）が成果である。

(6) 船田淳一「頼助『八幡講秘式』と異国襲来—鶴岡八幡の調伏儀礼と中世神道説」（前掲『神仏と儀礼の中世』第九章、初出は『仏教文学』二二一号、二〇〇七年）。

(7) 祭文については、五来重「解説」（同編『民間芸能』（日本庶民生活史料集成第一八集）三二書房、一九七二年）、岩田勝『中国地方神楽祭文集』（三弥井書店、一九八九年）、斎藤英喜「総説 祭文」（井上隆弘共編『神楽と祭文の中世』思文閣出版、二〇一六年）参照。

(8) 岩田勝『神楽源流考』（名著出版、一九八六年）、山本ひろ子「大神楽「浄土入り」—奥三河の霜月神楽をめぐって」（『変成譜』春秋社、一九九四年）、斎藤英喜『いざなぎ流 祭文と儀礼』（法蔵館、二〇〇二年）、星優也『妙覚心地祭文』と中世神道説—神宮文庫蔵「神祇方」をめぐって

『日本宗教文化史研究』第四四号、二〇一八年）、同「天の祭り論—奥三河花祭の〈秘儀〉をめぐって」（『HERITEX』三号、二〇二〇年）。

(9) 星優也「神祇講式を招し祈らん—藺牟田神舞「切利の法者、切利の小神子」をめぐって」（前掲注(7)『神楽と祭文の中世』第五章）、同『神祇講式』と神楽・祭文（『仏教文学』第四四号、二〇一九年）。

(10) したがって近代文献学的には偽書だが、弘法大師の權威化のみならず、弘法大師から直伝された書という宗教的意味があり、歴史的・宗教的・文化的意義は無視できない。空海に関連しては、松本郁代「中世真言密教界と「空海」（『中世王権と即位灌頂』終章、森話社、二〇〇五年）は、実在の空海とは別に、中世で始祖として複数の空海が活躍したとする。伊藤聡「空海と中世神道—両部神道との関わりを中心に」（『神道の中世』〈中公選書〉中央公論社、二〇二〇年）は、中世神道説における空海についての具体像を論じる。ちなみに筆者も、空海仮託『妙覚心地祭文』について、『妙覚心地祭文』の宗教世界—冥道・陰陽師・弘法大師（『佛教大学大学院紀要』第四六号、二〇一八年）で考察した。

(11) ニールス・グェルベルク「(二二二) 神祇講秘式（一段）」（講式データベース、File:///C:/Users/Owner/AppData/Local/Temp/Temp1_koshiki_archived20190922.zip/koshiki_archived/kdb/221/k221.htm）。現在オフライン版の閲覧が可能。

(12) 前掲注(2)岡田論文五八頁注(9)を参照。

(13) 『三輪流 一神道諸大事十ヶ口口』（た・四四七）は元和四年（一六一八）にまで遡る伝授があり、神道諸大事をはじめ「神道五部書」など伊勢神道関係の文献を多く伝える。

(14) 星優也「神祇講式「神冥」考」(『日本文学』六七・六、二〇一八年)。

(15) 『談山権現講式』については、黒田智一「『談山権現講私記』の歴史的意義」(『中世肖像の文化史』第四章、ペリカン社、二〇〇七年)、吉川聡・児島大輔・谷本啓「明日香村八釣の明神講関係資料調査 3 談山権現講私記」(『奈良文化財研究所紀要』二〇〇一年、担当谷本啓)を参照。

(16) 中世神道書と啓示の問題については、小川豊生「儀礼空間のなかの書物―啓示のテキスト―と仮託の構造」(『中世日本の神話・文字・身体』第V部第三章、森話社、二〇一四年、初出は『説話・伝承学』第八号、二〇〇〇年)を参照。講式の問題に関連して、船田淳一「春日権現験記絵」の貞慶・明恵説話とシヤーマニズム―憑依・託宣説話から講式儀礼へ―(前掲『神仏と儀礼の中世』第二章)がある。

(17) 倉昭順「『正月祝坐中之法式』―三段式―」(浄土宗総合研究所『教化研究』第四号、一九九三年)。また三段式については、西城宗隆「講式について―教化儀礼としての展開」(『法然上人八百年大遠忌記念論文集 現代社会と法然浄土教』浄土宗総合研究所、二〇一三年)も詳述される。近世期には増上寺関連の寺院において、正月儀礼として各地域で「三段式」が修されていたようである。

(18) 伊藤正義「中世日本紀の輪郭―太平記における卜部兼員説をめぐって」(『文学』第四〇巻一〇号、一九七二年)。

The is paper is an elementary analysis of Zingikouhisiki, a book of Shinto rituals from the medieval era. First, the books' content is summarized. Next, how the book was employed in ritual practices is explained. Finally, the process whereby Zingikouhisiki was transformed into Saimon is elucidated. These three sections clarify the early modern form of medieval Shinto and the place of religious books therein.

〔付記〕

本論文は科学研究費「神楽の中世的展開とその変容」(基礎研究(C)) 研究代表者 斎藤英喜)の成果である。